

花園城

はなぞのじょう

武蔵北部の有力国衆藤田氏の本城

埼玉県大里郡寄居町北西部に遺構が残るこの城は、武蔵七党猪俣氏の一族に連なる藤田氏が拠った峻厳な山城である。

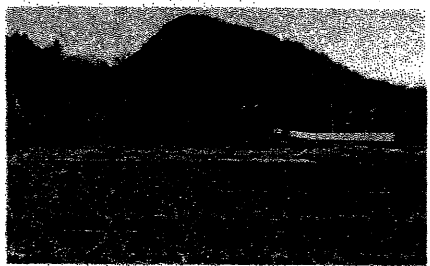
→花園城本郭跡
「花園城跡」の碑がある。

花園城年表	
1156～59年 (保元平治)	藤田政行の築城と伝われ、以後、藤田右衛門尉家邦が五代にわたり在城と伝わる。
1533年 (天文2)	秩父郡主藤田右金吾業繁、三宅神社の再興に協力する。
1555年 (天文24)	藤田家邦没する。
1558年ころ (永禄1)	藤田家に小田原城主北条氏康の四男氏邦が入婿となる。この時に氏邦は花園城に入城か。
1590年 (天正18)	豊臣秀吉による小田原攻め後、廃城となる。

藤田氏15代の夢の跡

江戸時代末期に編纂された「新編武蔵風土記考」には、半沢（榛沢）郡末野村の項で「花園城蹟 村の中程にあり、西南の方は都てから（空）堀にて、山の高さ二町程、芝山にて松の木立あり」とあり、藤田氏15代が在城したと記されている。

また、同書には、鐘打三阿弥が所蔵する文書に「廿人之飛脚かね打共は可踞候間、只今ちやうり踞候屋敷共に被下候、山共厳密可守申候、花園山共に被仰付者也、仍如件 丑（1589年〔天正17〕か）正月三日「未牧之か



↑花園城遠景
西側から見ると、独立丘陵のように見える。また、北側（写真の左側）は急傾斜で、南側はやや緩やかな傾斜であることがよくわかる。

花園城空撮

半島状に突出した丘陵で、東側を掘り切ることにより、防衛性を高めている。



ね打」とあり、この花園山が花園城を指しているといわれている。

このように、花園城に関する文献資料は、ほぼ皆無である。城主である藤田氏は、武蔵七党猪俣党の一族で、戦国時代後半には、武蔵国榛沢郡の西側半分と男衆郡の一部、秩父郡に勢力を張り、関東管領上杉氏の重臣であったと伝えられている。

1555年（天文24・弘治1）に藤田家当主泰邦が没すると、後継者問題から小田原北条氏の氏康四男氏邦が入

婿し、のちに鉢形城に入城したと思われる。1590年（天正18）、小田原合戦で鉢形城は開城したが、花園城も同時に廃城となったと思われる。

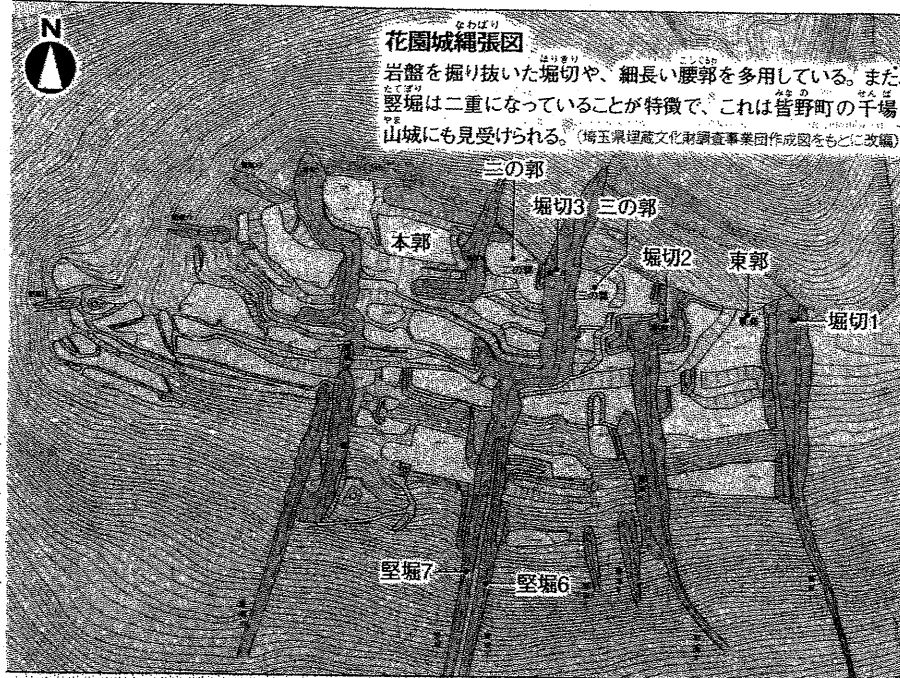
秩父への街道を押さえる要衝

花園城は、上武山地が関東平野に接する丘陵上に縄張され、荒川が形成した扇状地形の先端部に位置している。ここは、秩父街道や荒川などの交通の要所であり、街道筋には上・下本宿、小下宿、拾人小路、下宿、宿、

花園城 城データ

所在地	埼玉県大里郡寄居町
交通アクセス	秩父鉄道 JR八高線 東武東上線寄居駅北口下車、徒歩20分
城の形態	山城
天守の形態	なし
築城年	1156～59年（保元年間）
築城者	藤田政行と伝わる
文化財指定区分	埼玉県選定重要遺跡 寄居町旧跡
主な遺構	郭 土塁 堀切 堅堀など
別称	なし

荒川や秩父往還を見下ろす山城で、関東管領山内上杉氏の重臣であった秩父郡主と呼ばれた藤田氏の居城。秩父郡内の天神山城や千場山城などより規模は大きく、周辺には城下の名残を残す地名が数多く残る。



↑二の郭虎口
本郭から二の郭の虎口を臨んだ写真で、石積みがよく残っている。

蔵屋敷などの地名が残っている。麓には藤田善導寺、西には少林寺、東には藤田氏菩提寺といわれる正龍寺が建立され、荒川付近には藤田氏館跡と伝わる遺構が存在しており、この館および花園城を中心とした城下の状況を色濃く残している。

二重堅堀を擁する堅城

花園城は西側に突出した半島状の丘陵を、深い堀と堅堀で大きく四つに分断して郭を配置している。最も高い西側に本郭を配置し、標高201.9m、比高差90mを測る。本郭の西側は、急斜面に対し腰郭を複雑に配置している。

尾根伝いに東側へ二の郭・三の郭・東郭が配置され、東郭は、二・三の郭と比較すると、自然地形のままの部分



↑諏訪神社入口
現在の花園城登山口。社殿の裏側から西に向かっていると、堅堀6にぶつかるので、そこから登ると堀切3へ到達する。諏訪神社の右手には堅堀1が延びているが、荒れているために登ることはお勧めしない。



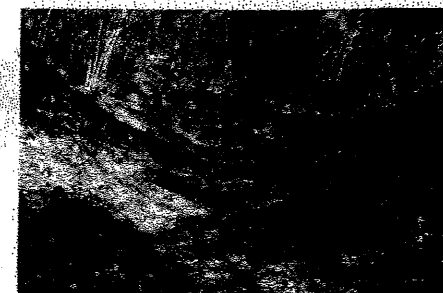
↑三の郭虎口
矢印のように降りていく虎口で、このような虎口が多く確認できる。

が多く、造成途中であった可能性がある。堀切は最大幅15m、深さ6～8mほどで、岩盤を掘り、その石材を郭で石積みしている。「折れ」を多用し、一部は堀底道として使用していたものと思われる。

北側の急傾斜に比べ、南側は傾斜が緩いことから、堀や小さな腰郭を複雑に配置している。山裾は、現在その

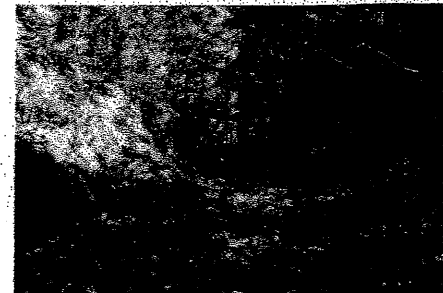
↑堅堀6・7

花園城の特徴である二重堅堀で、合流箇所から南を臨んだ写真である。この写真の撮影箇所から右手には石積みの虎口が形成されており、本郭南側の腰郭へ到達する。



↑堀切2 横矢掛

写真右にクランクし、正面左右から横矢を掛けやすくしている。



↑堀切1

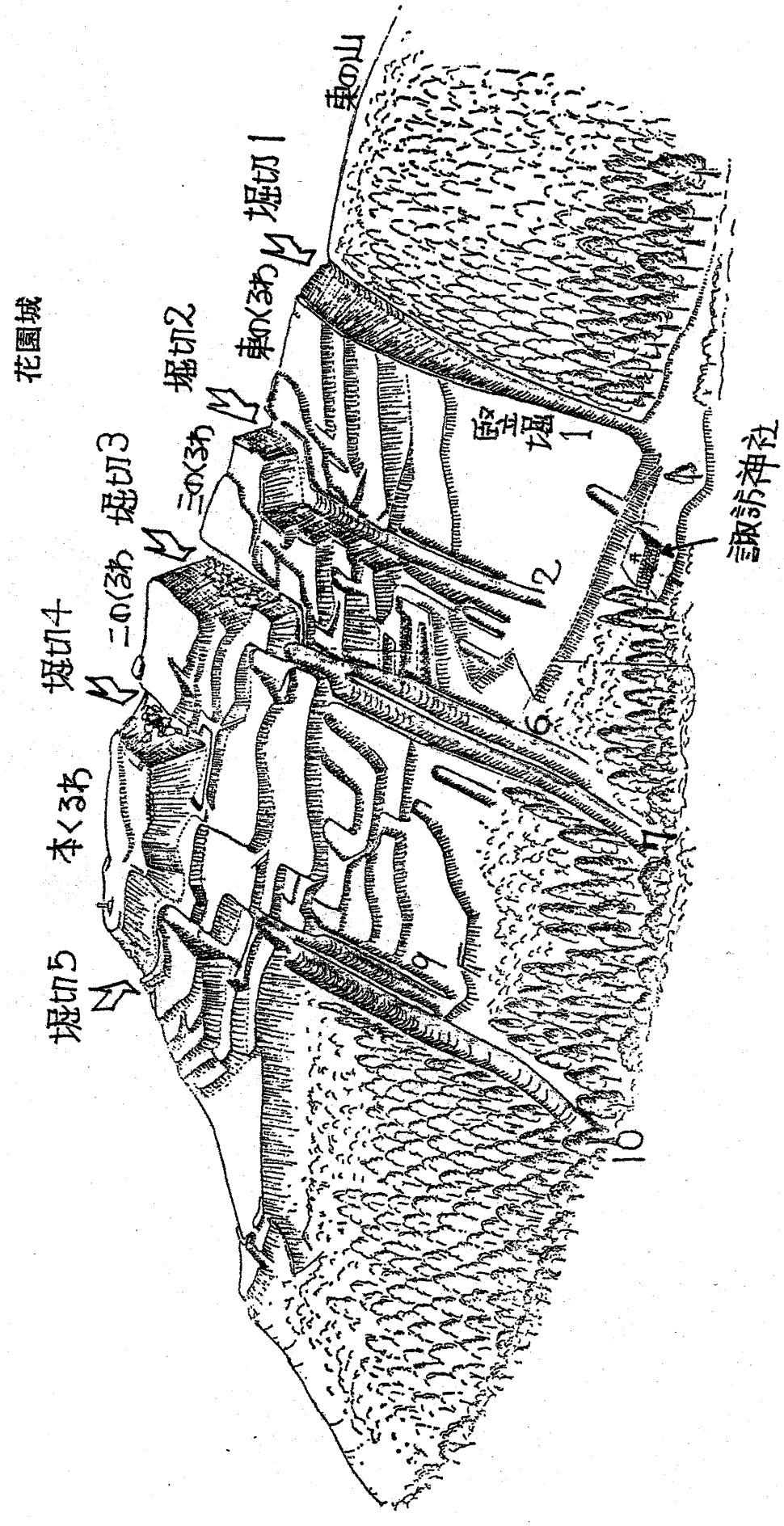
比高差6～8mをほぼ垂直に近い角度に岩盤を掘り抜いている。

痕跡が認められないものの、堀が巡っていたと伝えられている。

堅堀は二重になっており、藤田氏系城郭の特徴といわれている。また、高さ1mにも満たない石積みを多用するのが特徴で、近年明らかにされつつある北武蔵の石積み遺構との関連も注目される。

現状では、篠竹などが繁茂し、すべての郭に立ち入ることは困難であるが、虎口や通路もよく残っている。城跡は、すべて個人所有地であるため、見学の際は配慮が必要だ。（写真・文 石塚光夫）

「殺父路の古城址」中田正光(昭57) 有峰書店新社



花園城跡

